

デイト理論の研究

— ユースカルチャ論の内実化のために —

西川美紀

1 関心の所在

1971年、総理府青少年対策本部は『青少年の性意識』⁽¹⁾に関する調査を実施した。従来、タブーとされてきた性の領域にはいり、行政が積極的に全国調査に取り組んだという点で、それは画期的試みであったと言ってよいだろう。

しかし、行政側の「非常時」的対応にもかかわらず、その結果は、たとえば、「自由性交」をどう思うかという問に対して、それを否定するものが全体の60.7%にもものぼるという態度に端的に示されているように、現代日本の青少年の意外なほどの「健全さ」⁽²⁾を表わしている。類似の質問は1973年の『婦人に関する意識調査』⁽³⁾にもみられるが、やはり、否定的姿勢が看取できる。さらに、国際比較⁽⁴⁾によれば、彼らのそのような立場は一層明らかになる。

ところが、総理府が引き続いて実施した1974年の『青少年の性行動』⁽⁵⁾になると、前記の「常識的」意識と多少ともずれた意識、あるいは行動を指摘することができる。すなわち、性交経験者こそ全体の10.9%であるが、「性的関心」、「異性接近欲」は、12~14歳の階級が51.1%、46.4%という最頻値を示し、全体では89.7%、90.2%がそういう心理的経験をしている。「異性接触欲」は、男女差が顕著で、男子の90.1%、女子の38.5%がそれを経験しており、「性的興奮」も、男子の88.4%、女子の50.0%がすでに

それを覚えている。また、「異性接触欲」、「性的興奮」も男子はその12~14歳のとき45.0%、48.9%という最頻値、女子は15~17歳のとき43.7%、42.4%というそれを示している。さらに、デイトの経験者は、男子60.2%、女子60.5%を占め、両性とも15~17歳の度数が最高で、それぞれ52.8%、56.8%を占めている。この15~17歳のときに、「異性接触経験」、「キス経験」、あるいは上記の性交経験者が他の年齢階層をしのいで各々41.4%、51.7%、50.0%という最頻値を示しているが、それは偶然以上の結果であろう。

先に青少年の性意識等の保守性に言及したけれど、『性行動』の報告結果と照合するならば、青少年をめぐる状況は急速な変化にみまわれたと思われるし、彼らの穏当な道徳観も、具体的場面によってはむしろ大きくゆれる流動的なものと考えられる。

青少年のめざましい身体的成長をはじめとして、高校大学進学率の上昇、結婚年齢の上昇等がみられる現状、また、ジャーナリズムの「未婚の母」、「フリーセックス」、未成年の「売春」等の喧伝が蔓延る現代は、延長された青年期を精神的不安定と「非道徳的」行為で満たすことに貢献している。

私の素朴な関心は、このような「模索」の状況にあるとみられる現代の青年、すなわち未婚男女(pre-marital dyad)の行為様式を観察することである。

(1) 総理府青少年対策本部編、1972、青少年の性意識。

(2) 参照、湯沢雅彦、1971、現代青年の結婚観・家庭観、月刊エコノミスト、3、pp.50—55。

(3) 婦人に関する諸問題調査会議編、1974、現代日本女性の意識と行動。

(4) 総理府青少年対策本部編、1973、世界の青年・日本の青年(速報編)。「婚前交渉に対する態度」を比較してみると、「避けるべきである」とするのはスウェーデンの4.1%が最低で、日本は11国中8位の26.6%となっている。

(5) 日本性教育協会編、1975、青少年の性行動。1974年11~12月実施、層化二段抽出法、サンプル数；m:2764人、f:2236人、計5000人、サンプルの属性；全国12都市の高校生、短大生、大学生、である。

本小稿はその目的を達成するための一手段であり、デイトの原初形態を尋ねることを通じて、両性間の行為を規定する要因を検討し、さらにそのための基本的視点を育成するという役割を課されている。そして、もしこの手続きが順調に遂行されるならば、ユースカルチャー論の空虚な議論も内実化されはしないか。

2 デイト理論の系譜

一連のデイト研究において、その系譜を作成するとすれば、おそらく、次の3つの流れを区別することが可能だろう。

その第一は、W. Wallerに代表されるデイトとは結婚の招来とは無関係で、一次的性格の強い「たわむれ」(dalliance)であり、ゲームであるとする流れである。しかも、このはあいデイトがゲームである以上、勝者は高い地位と特権を獲得するから、それを得るための競争は、一定のルールを遵守しつつも過酷となるのは必至である。M. Mead流に言えば「デイトというものは、競争的なゲームであって、そのゲームの賞品は万人ひとしく認める『人気』である」⁽⁶⁾ということになる。G. Gorerが「デイトは高度に様式化された行為あるいは様式化された一連の行為であって、いくつかの点で形式がきびしく定まっているダンスに類似し、別の意味では、ひじょうに複雑な競技に類似している」⁽⁷⁾というとき、彼もこの派に含めることができる。

第2の流れは、Burgess-Lockeに代表される。彼らはあらかじめ、結婚をゴールと仮定したうえでデイトの機能や役割を分析しているようにみえる。また、この立場がデイト研究の主流であり、家族社会学の常套手段でもある。彼らは、男女両主体が最初のデイトから結婚までの間に、どのようにその関

係の中に包絡されていくのかを経過的、あるいは漸及的に観察するのが有効であるとする。つまり、単なるリクリエーションとしてのデイトから2人の間柄を固定的にする going steady⁽⁸⁾へと移行し、さらに当事者間で結婚意志を確認する「私的的了解」へ、そして、結婚意志の公示の儀式である婚約へ、最後に彼らの関係の集大成としての結婚に至る、という図式を提出する。

デイトと結婚を一義的に結合させた第2のいわば「発展段階論」に対して、S. Lowrieは「……デイトは結婚前の異性間の2人関係のプロセスである。ティーンエージャーの最初の約束もあるいはまた、結婚前の婚約したカップルの最後の約束も両方ともデイトである」⁽⁹⁾として、平坦ではあるが幅広い変域をもたせることによって、デイトの実際の、日常の意味あいを強調しようと努める。

Lowrieはまた、デイトがすぐれて教育的機能をもっていることを強調する。換言すればそれは、青少年が多くの異性と接触することによって情緒的に安定し、対人関係のマナーを習得し、さらに人格形成に役立つという社会化の機能でもある。彼は自らのこの立場を educational theory と呼んだが、Waller-Mead-Gorerと続くデイトの享乐的、角逐的性格を指適した第1の流れ、Burgess-Lockeに代表されるデイトの配偶者選択の機能を強調した第2の流れに加えて、Lowrieのそれをし

て第3の流れと考えることができる。デイトは「たわむれ」にすぎない、あるいはそれはデイトの逆機能であるという第1の立場を翻せばそれは、デイトが究極的には結婚に至るという旧来の規範に等しい。すなわち、デイトの配偶者選択の機能を暗黙に了解しているこの箇所、第1の流れと第2のそれとの結節点を見出すことができる。

(6) Mead, M., 1950, *Male and Female*, Victor Gollancz, pp.285-286, 田中寿美子・加藤秀俊訳, 1975, 男性と女性, 創元社, p.56.

(7) Gorer, G., 1948, *The Americans*, The Gresset Press, pp.81-82, 星新蔵・志賀謙訳, 1972, 北星堂書店, p.111.

(8) cf., Herman, R.D., 1955, *The "Going Steady" Complex: A Re-Examination, Marriage and Family Living*, Feb., pp.36-40., Smith, E.A., 1962, *American Youth Culture*, Free Press, pp.177-181.

(9) Lowrie, S.H., 1951, *Dating Theories and Students Responses*, *American Sociological Review*, 16, p.337.

R.F. Winch⁽¹⁰⁾ は、①リクリエーション、②地
位達成、③社会化、④人格の発達、⑤配偶者選択、
⑥夫婦の役割の習得、の6項目にデイトの機能を集
約したが、これによれば、第2、第3の立場を時間
的経過を独立変数として一直線上に配置することも
可能である。

つまり、デイトが理想的に機能するならば、その
初期には、Lowrieのいうように教育的機能が活発
となり、それが時間的蓄積と共に、コートシップへと目
的は転化し、最終的に自己に適格なつれあい(mate)
を獲得する⁽¹¹⁾というプロセスを描くことができる。

冒頭でデイト研究の3つの出自を区別したが、こ
こでそれらをひとつの出所、すなわちWallerの
所論に辿ることが許されるだろう。というのも、第
2、第3の立場がデイトの理想型と考えるならば、
Wallerの主張は、それらの陰影とみなせるのだから、
しかも、前者は後者を否定するために出現した
のだから。

以下、Wallerの所説を検討し、その後、その検
証と反証を試みているが、この方法の有効性はここ
に明らかであろう。

3 Waller理論の諸特徴

デイト研究の第一人者はといえば、やはりWaller
において他にはないだろう。彼の代名詞ともなっ
ている“The Rating and Dating Complex”
(1937)⁽¹²⁾が必ずといってよいくらいその後、この
系統の論文に引用されることからそれは明らかで
ある。Wallerの位置は、先の系譜から定かになっ
たと思われるが、彼の理論をとりあげる動機はさら
に2つある。そのひとつは、彼が旧来の結婚道徳に
挑戦するかのように、デイトは「たわむれ」であり、
時間かせぎの目的禁止のゲームであると規定した大

胆さ、または、そうした時代の推移をいちやく捉
えた卓見が注目されたからである。他のひとつは、
その独自のデイトの概念から派生するところの問題
点——たとえば結婚延期に起因する異性の自己利用、
妥協的恋愛、フラストレーション等——が、今日の
若者をめぐる状況と相似であると、少なくとも私に
は思われたからである。

3-1 Waller理論の背景とその担い手

Wallerが“The Rating and Dating Complex”
また“The Family”(1938)を公表した当時、ア
メリカ社会はちょうど村落共同体に支持されていた
それまでのコートシップのモレスが衰退する時期に
あたっていた。すなわち、face to faceの関係
が維持されていた社会では、若い男女は、最初に公
式に人を通じて紹介されなければ交際することが認
められていなかった。その後、男性が女性を映画や
ダンスに誘い交際が始まる。通常、コートシップは
女性の自宅で行われる。そのために彼女の両親は部
屋をしつらえている。しかし、両親や周囲の監視は
厳しく、特に女性は高価な贈物や身近な品物を受け
とることは許されず、夜更けのデイトやドライブも
禁止されている。しかし、婚約を終え女性の左手の
中指にダイヤモンドがはめられると、表面的には干
渉は避けられる。だが、2人を危険から守ろうと監
視は暗々裡に続けられ、婚約期間が長びくようなこ
とがあれば彼女の身内が黙ってはいない。⁽¹³⁾

このようにコミュニティでは、コートシップの各
段階は慣習の意味を付与され、先の段階は次の段階
への強力な圧力となり、その進行が暗示されていた。
しかも公的モレスはしかるべき年齢に結婚するよう
に作用しており、同時に、コートシップの期間中、
個人が傷(trauma)を負わなくて済むように保護し

(10) Winch, R.F., 1962, The Functions of Dating in Middle-Class America, in Selected Studies in Marriage and the Family, Winch, R.F. et al (eds.) Holt Rinehart and Winston, pp.506-509.

(11) cf., Adams, B.N., 1971, The American Family, Rand McNally, pp.178-184.

(12) Waller, W., 1937, The Rating and Dating Complex, American Sociological Review, 2, pp.727-734.

(13) Waller, W., 1951, The Family, Dryden Press (revised by Hill, R.), pp.99-100.

ていたと言える。

今や、その道徳が衰退することによって、新たにスリル追求的、異性の自己利用 (exploit) 的關係が出現した。

それらの新しい關係は、自動車と禁酒法の時代から生まれた。ダンスホール、ドライブイン、映画館、キャバレー、遊園地はコマージュリズムの都市文化から生まれた。都会の匿名性は、古き良き時代の悠長なコートシップのかわりに、行きずりの男女が束の間、喧噪の中でデートすることを可能にした。⁽¹⁴⁾

Waller がそのような行為の中核として注目したのが都市中産階級であり、その2世、大学生の男女である。彼らはアメリカ社会における社会移動の中心である。その未来は、立身出世、同時に訪れる幸せな結婚、そして、快適な生活環境という青写真から成っている。大学入学は洋々たる未来というパスポートを入手するため、あるいは両親の期待に沿うためでこそあれ、けっして甘い恋愛を体験するためではない。とすれば(男性にとって)結婚延期は必然である。しかし、一方で異性への興味は断ちがたく、周囲はスリル追求を刺激する材料に事欠かない。このジレンマ——結婚延期と抑圧されるがための恋愛渴望——の対応策として考案されたのがデートであり、真のコートシップとは区別されるところの「たわむれ」としてのそれである、とWallerは分析している。そして、“The Rating and Dating Complex” は、その妥協の制度化である。

3-2 中産階級のモレスの反映、妥協の産物としての“ The Rating and Dating Complex”

“ The Rating and Dating Complex” (以下RDCと略す)は端的に言えば、デートの主体である男女(大学生)が、各自の年齢集団に依った一定の指標に基づいて、自己と他者、同性と異性を評価し、より上位の人気と地位を獲得しようとして展開するゲームであり、娯楽である。換言するならば、

Greek の文化であり、同年齢集団の規範、すなわち、対内道徳の反映であり、その根本は中産階級の生活様式に規定されている。

Waller が、このRDCという原理を導き出す直接の対象となったのはX大学、ペンシルベニア州立大学である。それは、かなりの規模の大学で都会から隔たった小都市——学校経営が唯一の資金源である——に位置している。自宅通学者は少数で、大部分の学生は両親の監視から免れている。また、社会階層は同質とってよく、ほとんどが中の中から中の下の階層出身である。そして男性については約半数がフラタニティに属している。

X大学でのデートの内容は、キャンパス内でダンスをすること、映画をみること、大学の催し物を見たり、それに参加したりすること、ネッキングやダンスをするためにフラタニティハウスへ行くこと、で占められている。

Waller はまた、X大学の学生を暫定的に上から4つの階層、A、B、C、Dクラスに分類した。その際、規準とした項目は、男性のばあい、最良のフラタニティのひとつに属しているか、構内で活動が目立つか、フットボールチームのメンバーか、お金を持っているか、身だしなみがよいか、マナーや外見がスマートか、社交辞令(くどき文句)を心得ているか、ダンスが上手か、車を手に入れることができるか、であってこれらの総合点によって彼の階層、(同性集団内での自己の地位は、異性集団にとっては、それがどれほどデートの相手として望ましいかを意味する尺度となる)が決定される。

女性のばあいは、服装のセンスがよいか、社交辞令を心得えているか、ダンスが上手か、デートの相手としてどれくらい人気があるか、が規準となっている。とりわけ、最後の「デートの相手としてどれくらい人気があるか」というのは重要視されており、そのために女子学生は、たとえデートの約束がなくても常に引張風の風を装わなければならない。反対

(14) 斎藤真, 1976, アメリカ現代史, 山川出版社, 猿谷要, 1980, アメリカ人とアメリカニズム, 三省堂。

に、寄宿舎の電話口に何度も呼び出されるならば、仲間の羨望の眼に出会うことを意味する。

RDCは内に2つの競争を含んでいる。ひとつは、自己の年齢集団内の競争であり、クラス内、クラス間でのそれである。男子学生は、フラタニティに所属することが上位を占める前提的条件であるが、Aクラスの女子学生、つまり人気のある人物とデイトすることが要求される。逆もまたしかり、女性も特権維持のためには自己と同等以上の男性とデイトを続けなければならない。CクラスDクラスの学生は、反対に同層の相手をできるだけ避け、AクラスBクラスの異性とデイトすることによって上昇が可能となる。しかし、男女とも各集団はそのクラスごとにパートナーを厳重に審査するので、このヒエラルヒーの均衡は容易に崩れることはない。たとえば、検閲を免れた相手と恋に落ちることがあっても、それを仲間に秘密にし通すか、さもなければ、地位剥脱かの二者択一であり、RDCはその規範を貫徹する。

もうひとつの競争は、男女の年齢集団間のそれであり、男性と女性との根強い敵対に由来している。

RDCの法則によれば、デイトはゲームであったから、あくまで沈着冷静に事を選ばなければならない。もし、自我が、そのゲームに熱中したあまり包絡されるようなことがあればそれは敗北を意味する。自らは最小限の犠牲でどれほど多く相手を逆上せあがらせるか、あるいは自己利用するかが勝利のコツである。従って、男性は仲間に“gold-digger”の餌食にならないように忠告を発する。女性はいかに甘言を退け、いつどんでん返しを仕掛けるかが腕のみせどころである。女性はまだ、ブラックリストに乗らないように、last minute dateは極力避けなければならない。 「容易に約束を取り付けることができる女の子」、 「すぐ誘惑にのる女の子」、 「よからぬ場所に出入する女の子」という評判は禁物である。と同時に、できるだけ多くの相手とデイトし

なければならない、同一人物とのそれは、すでに競争を止めたことを意味するから。要するに、男女とも、異性に対して可能な限りシニクな態度をとること、それが身の保全に通じる。

X大学でのグループ内、グループ間の激しさ、RDC規範の嚴重さは以上のものである。その主要な原因のひとつは、性比の不均衡に求められるが、性比を含めた種々の条件は大学ごとに異なるだろう。すなわち、RDCの構造は大学ごとに違っているだろう。しかし、程度の差こそあれ、RDCの作用は今日の大学においては、否み難い事実であり、厳然と若者達の行為を規定している。⁽¹⁵⁾

3-3 問題点——悲劇の発端

競争とスリルに満ちた制度RDCは、立身出世と結婚延期という中産階級のモレスの分身であった。そこでのデイトは、規則の上に成り立つゲームとしての恋愛を意味し、感情的包絡が欠如している点で、真の性愛と区別することができた。そして、Wallerは随所でそれに伴う数々の問題点、今様のことばでいえば「病理的」とされる現象に触れている。

中流家庭の典型は男性が稼ぎ手、女性がハウスキーパーという夫婦関係に求められる。しかも、その性別役割の存在は揺がし難い。学生時代はこのモデルを実現するための訓練期間であるから、そこに遡って性別役割の規範が適応されている事実を指摘することができる。

すでに了解済の事柄であるが、男性にとって、大学時代は禁欲時代であり恋愛に感まけて学業を怠ることは許されない、ときに「理想の女性」に出会い、彼女が結婚を熟望したとしても、親掛の身ではそれも延期せざるをえないし、「若気の至り」と説得する両親の狡智には勝てない。Wallerは男子学生のこのジレンマを「二重の重荷」⁽¹⁶⁾——配偶者選択と配偶者扶養——と表現している。一方、女性は、将来

(15) Waller, W., 1937, pp.729-732, 1951, pp.150-155.

(16) Waller, W., 1951, pp.137-139, cf., Kirkpatrick, C. and Caplow, T., 1945, Courtship in A Group of Minnesota Students, The American Journal of Sociology, pp.114-125.

の重荷も軽ければ、大学は前途有望な青年を獲得できる絶好の場であるから、懸命に恋愛を仕掛ける。

このような両性間の利益の不一致が不幸の発端であり、根本的に於いて、純粋な恋愛、ひいては「友愛家族」の出現を阻んでいる。

Waller は、これらの大学生を対象に「好ましいデイトの相手」、「好ましい結婚の相手」の規準を導出した。⁽¹⁷⁾ それによると男性のばあい、前者に要求する項目は上位から、友好的であること、気こなしが上手、話し上手であること、ユーモアのセンスがあること、性的魅力があること、をあげている。後者に関しては、とりわけ純粋で正直であること、第2に良いコンパニオンであること、第3に子供好きであること、第4に友好的であること、の順番になっている。

女性のばあいは、前者には、良いコンパニオンであること、身なりが洗練され清潔であること、明るい性格であること、社交性をもっていること、後者には、人格者であること、情緒が安定していること、家庭生活や子供を大事にすること、明るい性格であること、が重要視されている。

このデータから以下の事柄が明らかになるだろう。第1に「好ましいデイトの相手」に要求されている項目は諸々のRDCの項目とはほぼ等価であること。第2に男女とも「好ましいデイトの相手」と「好ましい結婚の相手」の規準には差があること。つまり、デイトにおいては、いわゆる、“swell guy”，“glamour girl”⁽¹⁸⁾ が好まれるが、結婚となると「経済力があって頼りになる人」、「良妻賢母」へ転化する。第3に上記の差の様態が男女では多少とも違っていること。すなわち、女性には「良いコンパニオンであること」、「明るい性格であること」の2項目が重複しているように、差が男性のそれよりも小さい。これは「稼ぎ手」という義務を背負う

必要のない女性の気楽さを傍証しているのかもしれない。いずれにしても、これらの知見は、デイトとコートシップは分離すべきである、あるいは「恋愛と結婚は別物」という合理的命題が真であることを示している。

しかし、恋愛と結婚の2分法は容易に習得できるものではない。存外、そのコンパートメントはもろいのである。

Betty はその好例である。⁽¹⁹⁾ 彼女は、「恋愛は最高の冗談よ」という典型的な女子学生(coed)であったが、ある時、仲間内の規則を破ってでもという恋をした、しかし、彼女が夢中になったと知った相手の男子学生は見事に外方を向いてしまった。以来、彼女のシニシズムの殻は一層硬くなった。彼女は生涯、恋愛不能者かもしれない。

概して、男女とも結婚までの期間が長いほどRDCとの関わりは深くなる。つまり、ほとんどの男女がその在学期間中に手痛い経験をするを暗示している。

Wallerは、この側面を以下のように的確に記している。

若者は通常、結婚し身を固める用意ができる以前に、何回かの失恋を経験しているが、この前提からコートシップが開始される。そして、感受性の強い個人は、その失恋ごとに気力を摩り減らしていく。そのフラストレーションの後に彼らがいっせいに身につけるものは、他我への愛着を禁止する自制的態度であり自己防衛である。その恋愛の終結まで充分誠実であった個人でさえ、そのような痛手を全く免れるわけではない。「捨てられた」個人になると、プライドはこの上なく傷つけられ、その結果、恋愛に対する自己防衛は募り、ひいては進んで異性を自己利用するようになる。このようにして、自己防衛と意図的な異性の自己利用が、中産階級のコートシ

(17) Waller, W., 1951, pp.155—157.

(18) Parsons, T., 1942, Age and Sex in the Social Structure of the United States, American Sociological Review, 7, pp.604—616.

(19) Waller, W., 1951, p.171.

ップの主要な動機となる。⁽²⁰⁾

彼らは、本格的なコートシップに臨んで、一方では頻繁に line を交換し、他方で媚態を嬌し、演出を凝らし、いちやく相手の包絡を導こうとする。ひとたび、相手がその徴候を示したならば、あとは「最少関与の原理」⁽²¹⁾ が働くだけである。弱者に対する残酷な自己利用が開始される。当該の交際を継続するか否か、結婚するか否か、勝利者の意のままである。

RDCのプレイヤーとしての体験は、そのように実際のコートシップの種々の場面に持ち越される。いや功を奏するというべきか。すなわち、それらはコートシップを駆引き、あるいは交換——厳密には不等価交換であろう——の場に変化させてしまう。その結果、性別役割という基本的合意のもとに、精神的結合よりも物質的安定が、対等関係よりも支配関係が優位を占める階層内婚が取り結ばれる。

4 Waller理論の検証と反証

Wallerの理論的諸特徴のなかで終始論議的になるのは、RDCの存在いかん、またはその妥当性、そしてそれと表裏現象であるデイトの機能である。

まず、Waller擁護論からはいろいろ。

RogersとHavens⁽²²⁾の調査目的は、大学生の配偶選択過程全般について、RDCの作用強度を測定することであった。その対象は、アイオワ州立大学の学生だが、被調査者であるその学生達から11人の審判を選び、彼ら自身に、campus prestigeを測定する評定者の役割を負わすという二重の手続きをとっている。評定者達は、階層分類に際して、campus residence——フラタニティ(ソロリティ)寄宿舎、自宅のうちどこから通学しているか——という変数を選定したが、その分類妥当性は、以下の

4つの規準によって検証された。すなわち、campus residenceによって、あるいはresidence groupによって、①ダンスパーティの成功数、②構内活動、運動チーム、名誉組織への参加人数、③集団の規模と政治力、④自動車の所有率、金使い、成績、性格上の明るさ、において有意差が存し、概して、フラタニティ、ソロリティのメンバーほどこれら4項目の条件を満たしやすいことが明らかにされた。

また、フラタニティ、ソロリティのメンバーについては、被験者の相互評価によって、さらにそれぞれが上、中、下の階層にわけられた。したがって、メンバー内3つの階層、非メンバーの寄宿舎グループ、自宅グループという2つの階層、都合5つのそれがキャンパス内に存することになる。当該大学では、この階層分類を媒介変数とするならば、配偶者選択の全過程を通じて内婚的結合がみられcampus prestigeは存在していると結論できる。

Wallerは、結婚とは切り離れた「気楽なデイト」(casual date)においてのみRDCの作用を看取したが、RogersとHavensの場合は、配偶者選択過程全般においてその影響を確認したので、その敷衍とも解釈される。

Leiss⁽²³⁾もまた究極的にはWallerの弁護人とみなせる。Leissの論文はWaller批判から始まっている。つまり、Wallerが析出したRDCの体系は、第1に、「競争の一則物的体系」であり、構内の人気体系である。第2に、それが構内体系に止まるために、それは学生の所属する社会的階層、すなわち父親の階層という視点を欠落させた皮相的把握でしかない、と批判している。対案として彼が提出したのは「階層内デイト」理論と自ら命名したもので、①大学構内における「真剣なデイト」(serious date)は、現存の構内階層体系にそってとり行われ

(20) Waller, W., 1951, p.138.

(21) Waller, W., 1951, pp.190—192. cf., Becker, H. and Useem, R.H., 1942. Sociological Analysis of the Dyad, American Sociological Review, 7, pp.13—26., Blaw, P., 1964, Exchange and Power in Social Life, John Wiley, 間場寿一他訳, 1974, 新曜社, pp.66—73.

(22) Rogers, E. and Havens, A.E., 1960, Prestige Rating and Mate Selection on a College Campus, Marriage and Family Living, Feb., pp.55—59.

(23) Leiss, I.L., 1965, Social Class and Campus Dating, Social Problems, 13:2, pp.193—205.

る、②そのような構内でのデイトは親の階層体系を反映している、という2つの仮説から成っている。

彼のサンプルは、ヴァージニア大学の学生で、上層のGreekの会員、下層のそれに学生自身の評価によって分類され、さらにそれらの2グループを非会員の学生と対比するという処置がとられる。すなわち、これら上層会員、下層会員、非会員の3つのカテゴリーが、彼のいう「構内階層体系」である。

まず、仮説①の検討から始めよう。結論からいえば、それは検証されている。というのも、第1に、下層会員が、構内階層体系外で、つまり学外者と、「真剣なデイト」をするように迫られているのに対して、上層会員は、排他的に構内で同等以上の会員とそのようなデイトを実行しているという情報が入手されるからである。また、非会員においては、下層会員においてよりも一層、学外体系が徹底されていることも付言しておくなくてはならない。第2に、会員と非会員の間の差異が以下の項目において明らかにされたからである。すなわち、Greekは、社交性、知性、思慮深さ、構内での活動、さらに外見、ダンス技術、服装、において勝っているのである。

仮説②についてはどうか。Leissが父親の社会階層の指標に適用したのは、その職業と収入の2つであった。収入のみに従って分類したところ、予測どおり男女とも、上層、下層の会員、および非会員の間に差異は存在した。しかし、性別と会員内階層を無視した会員、非会員という次元の水準によるなら、その差異は消滅してしまった。従って、階層的上流というのはここでは、厳密には、収入の多少を指すのではなく、管理職、専門職といった職業的あるいは知的上流を意味することになる。上層のフラタニティ会員は必ずしも尊大な金満家の子息ではなく、無所属の女子学生は意外にも粗野な素封家の令嬢なのである。従って、先にみた構内階層体系は親の社会階層を正確には反映しているとはいえない。このように、第2の仮説を全うしえなかったLeiss

は、Waller批判を満足にしえず、むしろ、「気楽なデイト」だけでなく、第1の仮説において「真剣なデイト」にまで延長して、WallerのいうRDCの作用を認める結果となっている。この意味で、彼は、Wallerの擁護者なのである。

Wallerに向けられるのは、上記のような弁明——意図的なものであれ客観的結果であれ——であるよりは、強気の反駁であるのが普通だ。

W. Smith⁽²⁴⁾はそれを忠実にX大学を選んで行った。つまり、Wallerが30年代の半ばにおいて発見したものが、50年代においても通用するか否かを知ることが彼の目的であった。

X大学は約15年の間に次のような変化を来している。まず、Wallerの時代には6:1であった男女比が、Smithのときには3:1となり、女子学生が約2倍に増えている。また、フラタニティの会員率については、全男子の50%であったそれが26%に減少し、規模縮少と共に会員の集団的勢力は弱体化した。ソロリティについても同様で、非会員との区別はかってほど明確ではなくなった。

Smithはこれらの構内での状況変化が、WallerのRDCの体系の妥当性にいかに影響を及ぼしているのかを測定しようとした。Wallerが採用した項目のうち、Smithの女性被験者が男性に関して重要としたのは、マナーや外見が洗練されていること、ダンスが上手なこと、容姿がよいこと、構内活動が目立つこと、良い服をもっていること(服装のセンスがよいこと)であった。また、男性が、性的関係をもつこと、構外から女性を「輸入」してくること、にはほとんど全員の女性が、ベッティング、人気のある女性とのみデイトすること、お金をもっていること、名誉組織に加入していること等の項目を満たすことにもほとんどの女性が否定的である。

男性の女性に対する条件に関してはどうか。「デイトの相手として人気があること」をWallerは最も重要視したが、それは、マナーや外見が洗練され

(24) Smith, W.M., 1952, Rating and Dating: A Re-Study, Marriage and Family Living, pp.312-317.

ていること、ダンスが上手であること、に次いで3番目に重要とされている。一方、ソロリティに属していること、名誉組織に属していること、名の知られた場所に行っていること、仲間が同意した相手とのみデートすること、については否定的意見が強い。

これらの調査結果は、概して、Greekの相対的地位低下という先の変化と呼応しているといえるであろうし、Wallerの時代ほど物質的条件、集团的属性が重要視されていないことを示しているといえる。具体的には、学生達はSmithが新たに挿入し、Wallerの項目にはみあたらなかった、礼儀正しい、思慮深い、快活、友好的態度、さらに、知的会話のセンス、ユーモアのセンス、というそれらをデートの相手に期待するようになっていく。RDCは同年令集団への凝集、その統率力を存立基盤としていたが、そうすると、この傾向は、集团的属性に対する個人的選好の優越とみなすこともできる。X大学でのデートはおそらく、集团的規範に左右されることのない自由な個人の間との関係となりつつあるのだろう。

Blood⁽²⁵⁾の反証はより周到で、説得力に富んでいる。彼はそれを1953年のミシガン大学の学生を対象とした調査を通じて果した。その経過を4つの工程に分けて見ることができる。第1はWallerが主張したように、デートの相手としてどれくらい人気があるかを測定するところの一定の構内規準が存在するか、第2は、もし、そのような構内規準が存在するとすれば、それはWallerのいうRCDの項目とどの程度一致しているのか。第3にさらに、デートの一般的条件としてのその構内規準は、「気楽なデート」という現実的場面における個人的選好をどの程度規定するのか、そして、第4にその「気楽なデート」の場における条件と、「真剣なデート」の場におけるそれとは、Wallerのいうように明確に断絶があるのか、である。

第1、第2の命題は、むしろ不分離の過程である。

Bloodは、Wallerの採用した項目にくわえて、Smith等のそれを若干修正したものを被験者にチェックさせた。その結果、Wallerに関連の深い項目は、平均して、男女の半数前後の支持しか得ていないのに対して、Smith等の創作であるより個人的属性を強調した「パーソナリティタイプ」の項目は、男女のほとんどが賛意を示していることが明らかになった。前者において特に否定的傾向の強い項目、すなわち、最もWaller的色彩の濃いそれらは、構内活動で目立つこと、フラタニティに属していること、車を手に入れることができること、お金を豊富にもっていること、であり、女子学生の認知は、デートの際、これらの条件を男子学生に特に要求してはいない。また、男子学生の立場は、女子学生が、ペッティング、ネッキングに応じやすいという評判をとっていないこと、last minute dateを受けないこと、名の知られた場所に行っていること、人気のある男性とのみデートすること、これらの項目を満たしていても、さして意に介さないことを表明している。

従って、学内での人気を測定する際に、一定の規準は存在するかもしれないが、それはもはやWallerのいうRDCの要素によるのではなく、Smithのそれに一層近い、物質的条件よりも個人のパーソナリティを重視した規準であることが確認された。構内規準として、特に尊重されているパーソナリティは、明るく陽気である、ユーモアがある、気取りがない、思慮深い、スポーツ好きである、身ぎれいである、の6項目である。Bloodはこれらの相互作用を円滑にすすめる効果に注目して、一括して「人間関係」の項目と呼んでいる。

第3工程は、第1、第2のそれにおいて抽出された構内規準のエッセンス、すなわち「人間関係」の項目が、実際のデートの場での行為を規定する要因であることが確認されるならば、その目的を果した

(25) Blood, R.O., 1955, A Retest of Waller's Rating Complex, Marriage and Family Living, Feb., pp.41-47, 1956, Uniformities and Diversities in Campus Dating Preferences, Marriage and Family Living, Feb., pp.37-45.

ことになるだろう。

はたして、「人間関係」の項目は、気楽であれ、真剣であれ、デイトのとき、当該男女が一貫して依拠する規準であった。換言すれば、彼らは、playing the fieldからgoing steadyさらに婚約というコミットメントの転化とは無関係にいわば非物質的なもの、人格的接触を異性に期待するということである。特に女子学生は、そこに6項目を追加することによって一層、「人間関係」への傾斜をみせている。その6項目とは、良いセンスをもって知的である、知的な会話ができる、正直あるいは実直である、自主的に仲間に加わる協調性がある、場所柄に応じた服装ができる、人格円満である、というものだ。知性と実直は彼女達の解放された平等的夫婦関係への熱望をあらわし、温厚さと協調性は男女一体となって生活する可能性を希求する姿が映し出されている。

第4に、繊細で快適な人間関係が一貫して強調される一方で、「気楽なデイト」と「真剣なデイト」の期待の間に有意差が存在する項目がある。合計9項目においてそれがみられる。すなわち、情緒的に成熟すること、相手を頼りにすること、人格円満であること、愛情深いこと、聞き上手であること、同性の友人とうまくやっていけること、情熱的で生命力があること、自分の家族の賛成が得られる人物であること、ダンスが上手であること、の9項目がそうである。これらのうち最後の「ダンスが上手であること」を除いた残り8項目については、それとは正反対に「気楽なデイト」から「真剣なデイト」へと状況が進展するにつれて、それらを具備するようほぼ無限大に異性への期待が高まるという現象がみられる。

とすれば、Wallerが2種のデイトの間には2種の規準が作用しているとしたのは、背理的には正当であったといえるだろう。半永久的なつれあいに、自己の言い分を理解する知力と優しさを切望し、異性という自己に包絡される感受性を見出し、枯れることのない生命力を求めるこれらの項目は、「人間関係」の

項目とは何ら矛盾しない。むしろ、それとの連続性の上に、それを深化させることに役立つだけである。

このように、ミシガン大学の学生はデイトと結婚の規準を区別することもなければ、それらの相手も変えることはないのである。

もちろん、Blood個人は、Wallerの採用した指標が依然として、デイトの裏側に忍び込み、車や毛皮のコートが大学生を眩惑するチャンスを見逃してはいない。しかし、それは取残されたかつてのエリート、Greekが固執する規準である。学生の大部分、若者の多くは、裏表のない日常的相互作用のうちに、信頼に基づいた人間関係を育成することに励んでいる。

そして、そこにこそ将来、友愛と平等的精神に支えられた夫婦関係が見い出せる、と結んでいる。

5 ま と め

まず、Waller理論の特徴は以下のように要約できるだろう。第1に、彼はデイトをコートシップとは異質の男女の単なる「たわむれ」と規定した。つまり、デイトは結婚とは切り離れた次元で展開される競技にすぎなかった。第2に、そのようなデイトの体系化が、“The Rating and Dating Complex”であった。その中で“swell guy”や“glamour girl”を自認する男女が人気を競うが、そのレースを背後で支えているのは、Greekの規準であり同年齢集団の勢力であった。しかも、RDCはより根本的には彼らの大半が所属している階層のモレス、すなわち、中産階級のそれによって支配されていた。両親達は、立身出世、幸福な結婚、安定した生活という理想からひとつの定言命令を演繹する。結婚延期と刻苦勉強がそれである。RDCは、それと現実的欲求を和解させるために擬似恋愛の場を提供する妥協的措置に他ならない。第3に、その対策の矛盾が種々の悲劇となって表出する。RDCゲームのうちに、純粹さや新鮮みを失った若者は、あるばあいには異性を不当に自己利用する技術を習得するようになる。また、他のばあいには、あ

まりの失恋の痛手から極度に自己防衛意識が発達し、恋愛失格者と化してしまう。そして、そのような苦い経歴を持った男女が凄まじい駆け引きの後辿りつく結婚は、性愛よりも物質的安定を、平等的関係よりも性別役割を尊重したそれである。

次にWaller理論の検証と反証を概観した。

RogersとHavens、またLeissはRDCの競争的、物質的性格を学生の間で確認することによって、数少ないWallerの擁護者となった。

しかし、形勢はSmithやBloodに代表される反Waller派に有利であった。SmithはWallerが調査を実施した同じX大学において、その15年後にはもはやRDCが全うされていないこと、反対に、無益な競争を廃し、則物的欲求に抗し、パーソナリティの尊重へと学生意識が移行していることを明らかにした。さらにBloodは彼らが要求しているそのパーソナリティが、異性をより理解するための知性であり、信頼関係をより深くするための熱情であり、

誠意であることを明らかにした。しかも、そのような人間関係がデイトごとに密度を増し、将来、平等的夫婦関係を構築する際の強力な推進力となることを強調した。

もはや、Waller理論の不適合性は明らかであるように思われる。

しかし、たとえばMcDaniel⁽²⁶⁾が指摘したように、女性は恋愛においては最終的には受身となり、自我を抑圧しなければ受け入れてもらえない状況がある。あるいは、男性の「二重の重荷」に象徴される性別役割は健在である。「仕事のできる夫」、「家事育児の上手な妻」というステレオタイプは有効である。さらに、Blood⁽²⁷⁾が触れているように、性モラルの領域において「二重道徳」は残存している。その他、ここかしこに分散している残余項を探し出すのはきわめて容易である。これらの残滓がすべて除去されたときはじめてWaller批判は完了するのであろう。

(26) McDaniel, C.O., 1969, Dating Roles and Reasons for Dating, Journal of Marriage and the Family, Feb., pp.97-107.

(27) Blood, R.O., 1956.